宝満山

太宰府の北東に位置する宝満山（標高 829m）は、古来より祈りと祭祀の場であった。山頂にある特徴的な岩によってこの山はかつて修験者の信仰を集めた霊峰であり、現在は太宰府市や博多湾を一望しにくる登山者で賑わっている。

宝満山は奈良時代（710～794 年）、国土を精神的に定義し、守ることを目的とした国境儀礼の場であったと考えられている。南から見ると山はほぼ完全な三角形を形成しており、その形から、先史時代から神々が住む場所として崇められてきた。この神聖な特質から、宝満山は国の北西の限界を聖別し、物理的および超自然的な力による侵略から神々の守護を求めるための自然な場所となった。

この地域はアジア大陸に近接しており、博多湾は中国や朝鮮半島を往来する船にとって好都合な港であった。波乱に満ちた航路を行く船旅は非常に危険であり、多くの使節や商人や役人が航海の安全を祈願して宝満山に登った。中国留学から帰国し、天台宗を開いた僧侶の最澄（767-822）もその一人だ。最澄は出発前に医療の仏である薬師如来像を彫り、寄贈したと伝えられている。

鎌倉時代（12 世紀後半～1333 年）、大宰府に任命された官人（かんにん）は、山麓の行政施設に住み、政務を執った。

13 世紀後半から 14 世紀半ばにかけて、宝満山は仏教、神道、道教、山岳信仰の要素が混ざり合って融合した信仰である修験道の修行者の巡礼地となった。修験道では、人里離れた山頂、岩窟、滝が特に神聖な場所とされ、山には 370 以上の僧坊があったと言われている。江戸時代（1603-1867）には、宝満山の山頂に近い、特に大きな住居に住職（座主）が住んでいた。現在も高い石垣と立派な石段が残っており、その住職の威光を物語っている。